

# ハーディネスとライフイベントがアタッチメントスタイルの変容に及ぼす影響

川本 薫<sup>1</sup>・宮本邦雄<sup>2</sup>

(1: 豊田市青少年相談センターパルクとよた, 2: 東海学院大学)

## 要 約

本研究では、アタッチメントスタイルの変容とハーディネス及びライフイベントの関連を明らかにすることを目的とし、大学生を対象とした質問紙調査を行った。調査1の6ヵ月後に調査2を実施し、188名のデータを分析した。その結果、調査1のコントロール、コミットメント、ハーディネス合計と調査2の見捨てられ不安及び親密性の回避との間に有意な負の相関がみられた。見捨てられ不安変化量には、ハーディネス低群で低下傾向がみられ、ネガティブライフイベント重要度と解決度との交互作用が認められた。親密性の回避変化量では、ネガティブライフイベント重要度とポジティブライフイベント満足度との交互作用が認められた。さらに、アタッチメントスタイル両尺度の標準得点に基づいて、上昇群、変化なし群、低下群に分類し、ハーディネス及びライフイベント各指標を比較した。見捨てられ不安の上昇群がコミットメントとハーディネス合計で有意に高い得点を示した。以上の結果から、ハーディネスが低い人はライフイベントの影響を受けやすいと考えられる。さらに、アタッチメントスタイルのタイプの変容が多かったのは、とらわれ型と恐れ型であり、見捨てられ不安次元の変動性を反映した結果であった。本研究の結果から、ハーディネスは見捨てられ不安と親密性の回避を低く保つように作用していると考えられる。すなわち、ハーディネスは一時的な変化よりも長期的な安定型の維持を保つように影響すると推察される。また、ライフイベントは、アタッチメントスタイルの変容を促す要因と考えることができる。

キーワード：アタッチメントスタイル、ハーディネス、ライフイベント

## 問題と目的

Bowlby(1969, 1973, 1980)は、赤ちゃんが、特定の対象(通常は母親)に対して形成する情緒的結びつきをアタッチメントと命名し、乳幼児期における養育者との相互作用を通して、対人関係における鋳型モデルとなる内的作業モデル (Internal Working Model ; 以下, IWM) を形成するというアタッチメント理論を提唱した。アタッチメントスタイルとは、成人におけるアタッチメントの個人差を意味するだけでなく、ストレス状況下において繰り返されるアタッチメント対象との間での相互作用の質に応じて形成された「パーソナリティ」である(中尾, 2010)。

アタッチメントの個人差は、乳幼児期においてはストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation

Procedure ; SSP, Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978) によって、安定型 (B型)、回避型 (A型)、アンビバレント型 (C型) の3分類、さらに無秩序・無方向型 (D型) を加えた4分類が用いられてきた。青年期・成人期においては、成人アタッチメント面接 (Adult Attachment Interview ; AAI, Main & Goldwyn, 1984) によって測定され、乳幼児期の分類に対応する、安定自律型、アタッチメント軽視型、とらわれ型、未解決型に分類される。また、質問紙法を用いた Bartholomew & Horowitz (1991) は、自己に関する IWM とアタッチメント対象に関する IWM の組み合わせで、安定型、回避型、とらわれ型、恐れ型の4分類による測定法を開発した。なお、安定型とその他の不安定型に2分する方法もとられている。

Bowlby(1979)は、アタッチメントの生涯発達について、IWM は比較的永続し安定したものであるとし、その実

証的研究が行われてきた。Waters, Merrick, Treboux, Crowell, & Albersheim(2000)の長期縦断的研究によれば、乳幼児期の SSP と成人期の AAI によるアタッチメントスタイルの一致率は、A, B, C の 3 分類で 64%、安定/不安定の 2 分類で 72%であり、ある程度の連続性がみられた。一方、ハイリスク・サンプルを対象とした Weisfield, Sroufe, & Egeland(2000)によると、乳幼児期で 39%の不安定型が 18-19 歳時には 68%に増加した。こうした変化は、両親の離婚など養育環境の変化を反映していると考えられる。安藤・遠藤 (2005) によると、アタッチメントの安定性は、個人のもつ固定的な IWM に支えられているというよりも、親の養育態度などの環境の安定性がその連続性を維持しているのではないかと述べている。

一方、年少時に不安定なアタッチメントスタイルであったとしても、青年期以降に親以外のアタッチメント対象とのポジティブな関係を通して、安定型の方向に変化することも報告されている(獲得安定型, Pearson, Cohn, Cowan, & Cowan,1994)。

成人期のアタッチメントスタイルの変動について、Baldwin & Fehr (1995) は、先行研究の結果から、アタッチメントスタイルが比較的短期間(数か月)に変化するのには 30%程度であることを示した。特に不安定-アンビバレント型の変動が大きく、アタッチメントスタイル質問紙に対する関係スキーマの活性化を反映している可能性を示唆した。

岡島(2010)は、青年期のアタッチメントスタイルの変化を 2 度の反復測定により検討した。アタッチメント変化要因として恋人の応答およびその応答に対する主観的認知を取り上げ、アタッチメントスタイルの変化に及ぼす影響を検討した。その結果、アタッチメントスタイルは 1 ヶ月の間に 25%の個人が変化していること、恋人のポジティブな応答性を認知すること、応答の一貫性を認知することが、アタッチメントスタイルを不安定型から安定型に変化させる要因になることを示した。青年期においては、心理的離乳を通して自立的生活を始めると、親以外の他者の影響が大きくなり、新たな対人関係の影響によってアタッチメントスタイルの変動は大きいのではないかと考えられる。

アタッチメントの変容に関わる要因として、親子関係や恋愛関係といった関係性の要因も重要であるが、個人の持つ特性資源としてのハーディネスや一定の期間に体験したライフイベントの影響も考えられる(中尾・加藤,

2006)。不安定なライフイベントは不安定なアタッチメントスタイルへの方向に作用し、ポジティブなライフイベントは安定的なアタッチメントスタイルの方向へ変容をもたらすであろう。

ハーディネス(hardiness:頑健さ)とは、Kobasa(1979)が提唱した、高ストレス下でも心身の健康を維持することができる人々が持つ性格特性であり、チャレンジ(challenge)、コントロール(control)、コミットメント(commitment)の 3 要素からなる。チャレンジは、安定性よりもむしろ変化が人生の常であり、成長の機会であると捉える傾向、コントロールは、個人が出来事の推移に対して一定の範囲内で影響を及ぼすことができると信じ、そのように行動する傾向、コミットメントは人生の様々な状況に自分を十分関与する傾向である(城, 2010a ; 2010b)。

ハーディネスをライフイベントとアタッチメントスタイルの変容との間の調整変数として考えると、ハーディネスはネガティブライフイベントによるストレス反応の影響を抑えると考えられる。すなわち、ハーディネスは不安定なアタッチメントへの変化に対して抑制的な影響を及ぼすと考えられる。しかし、アタッチメントとハーディネス、ライフイベントの関連を検討した研究は見受けられない。そこで本研究では、ハーディネスとライフイベントがアタッチメントスタイルの変容に及ぼす影響を検討する。

本研究では以下の仮説を検討する。

- (1)ハーディネスにおけるチャレンジ、コントロール、コミットメントの 3 要素が高いと、アタッチメントスタイルにおける見捨てられ不安、親密性の回避の得点が低い。
- (2)ネガティブライフイベントを多く体験し、その重要度が高く、解決度が低い人は見捨てられ不安および親密性の回避の得点が上昇する。
- (3)ネガティブライフイベントが多い場合、ハーディネスが低い人は、ハーディネスが高い人よりも、見捨てられ不安および親密性の回避の得点が上昇する。

## 方法

### 調査対象者

調査 1 と調査 2 に参加した調査参加者から、大学生 458 名のデータをマッチングに用いた。マッチング可能であった調査参加者は計 238 名で、内訳は、男性が 87 名、女性は 151 名、平均年齢は 20.43 歳( $SD=3.11$ )であ

った。そのうち、回答に不備のあるものを除いた 188 名、男性 63 名、女性 125 名、平均年齢 20.57 歳 ( $SD = 3.39$ ) のデータを以後の分析に用いた。なお、有効回答率は 79.0%であった。

### 調査手続き

大学生を対象とした質問紙調査を行った。調査 1 は 2014 年 4-5 月、その 6 ヶ月後に調査 2 を実施した。講義中に質問紙を配布し、調査内容を説明し、調査協力への同意を得た上で回答を求めた。なお質問紙は、講義中および講義終了時に回収した。質問紙のフェイス・シートに個人情報の保護等のインフォームド・コンセントを記載し、質問紙の実施前にそれを読み上げ、質問紙の実施中に回答を中止することが可能な点などを参加者に口頭で説明した。

### 質問紙構成

フェイスシート(性別,年齢)を含む以下の尺度から構成した。①アタッチメントスタイル尺度: ECR-GO(中尾・加藤, 2004a ; 2004b)より因子負荷量の高い計 24 項目(見捨てられ不安 12 項目,親密性の回避 12 項目), 7 件法で回答を求めた。②ハーディネス尺度: 15 項目版ハーディネス尺度(多田・濱野,2003)より 15 項目, 4 件法で回答を求めた。③ライフイベント尺度: 大学生用ライフイベント尺度(鈴木・大塚・小杉,2001), ネガティブな日常的出来事尺度大学生版及びポジティブな日常的出来事尺度大学生版(細田・三浦,2011)を参考に作成した各 15 項目, 計 30 項目, ネガティブライフイベント(以下, NLE)は, 出来事の経験の有無を 2 件法, 自身にとっての重要度及び解決度を 4 件法にて回答を求めた。ポジティブライフイベント(以下, PLE)は, 出来事の経験の有無を 2 件法, 自身にとっての重要度および満足度を 4 件法にて回答を求めた。④マッチング変数(学年, 年齢, 血液型, 誕生日)。なお, 調査 1 では, ①, ②, ④への回答を求め, 調査 2 では, すべての尺度に回答を求めた。

## 結果

### ハーディネスとアタッチメントスタイルの相関

調査 1 と調査 2 における各尺度の平均と標準偏差を算出し, Table1 に示した。調査 1 と調査 2 のアタッチメントスタイルとハーディネスの各尺度得点間には有意な差は認められなかった。

さらに, ハーディネスとアタッチメントスタイルの関連を検討するために, Pearson の積率相関係数を算出した (Table2)。調査 1 と調査 2 のマッチングデータにおいて, コントロール, コミットメント, ハーディネス合計と見捨てられ不安との間に有意な負の相関がみられた ( $r = -.161, -.211, -.181$ )。また, コントロール, コミットメント, ハーディネス合計と親密性の回避との間にも, 有意な負の相関がみられた ( $r = -.335, -.146, -.249$ )。

Table 1 調査 1, 2 における各尺度の平均値と標準偏差

	調査1			調査2		
	N	M	SD	N	M	SD
ECR-GO						
見捨てられ不安	184	43.06	15.16	187	41.61	15.36
親密性の回避	185	48.28	11.37	187	48.63	12.76
HD						
チャレンジ	186	14.80	3.62	188	14.69	3.66
コントロール	188	12.73	3.49	187	12.36	3.58
コミットメント	188	13.62	3.35	187	13.28	3.48
HD合計	186	41.03	7.69	186	40.36	8.02
LE						
NLE体験数				188	6.39	3.61
NLE重要度				184	2.91	.61
NLE解決度				185	2.57	.67
PLE体験数				188	6.44	2.89
PLE重要度				183	3.46	.45
PLE満足度				186	3.25	.60
HD: ハーディネス	PLE: ポジティブライフイベント					
	NLE: ネガティブライフイベント					

### ハーディネスとライフイベントがアタッチメントの変化量に及ぼす影響

調査 2 から調査 1 のアタッチメント両尺度の得点を減じたものを変化量とし, 見捨てられ不安変化量, 親密性の回避変化量とした。見捨てられ不安変化量の平均値は男性で-.871, 女性で-2.16 であり, 標準偏差はそれぞれ 16.250 と 10.232 であった。また, 親密性の回避変化量では, 平均 (男性=1.44, 女性=-.63), 標準偏差 (男性=9.701, 女性=7.431) であった。すなわち, 全体をみると大きな変動はないが, 個人差が大きいことがうかがえた。

そこで, ハーディネスとライフイベントがアタッチメントの変化量に及ぼす影響を検討するため, 見捨てられ不安変化量, 親密性の回避変化量を従属変数, 調査 1 のハーディネス合計, 調査 2 の NLE 体験数, NLE 重要度, NLE 解決度, PLE 体験数, PLE 重要度, PLE 満足度を独立変数にした重回帰分析を行った。その結果, いずれにおいても, 影響は有意ではなかった。

ハーディネスとライフイベントがアタッチメントスタイルの変容に及ぼす影響

Table2 調査1と調査2の各尺度間相関

	見捨てられ不安	親密性の回避	チャレンジ	コントロール	コミットメント	HD合計
W_見捨てられ不安	.663 **	.130	-.041	-.161 *	-.211 **	-.181 *
W_親密性の回避	-.006	.770 **	-.090	-.335 **	-.146 *	-.249 **
W_チャレンジ	-.136	-.134	.797 **	.285 **	.321 **	.637 **
W_コントロール	-.273 **	-.347 **	.296 **	.765 **	.426 **	.661 **
W_コミットメント	-.226 **	-.152 *	.180 *	.326 **	.755 **	.554 **
W_HD合計	-.273 **	-.287 **	.573 **	.613 **	.654 **	.823 **
NLE体験数	.196 **	-.044	.055	.093	.074	.074
NLE重要度	.241 **	-.072	-.055	.058	-.015	-.020
NLE解決度	-.192 **	-.197 **	-.021	.193 **	.148 *	.134 †
PLE体験数	.021	-.150 *	.111	.286 **	.150 *	.225 **
PLE重要度	-.107	-.162 *	-.074	.193 **	.114	.095
PLE満足度	.045	-.277 **	-.090	.210 **	.057	.065

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

W = 調査2

各群比較によるハーディネスとライフイベントがアタッチメントスタイルの変化量に与える影響

次に、ハーディネス合計得点の中央値によってハーディネス高群と低群を構成し、各ライフイベントの体験数、重要度、解決度、満足度の平均値によって高群と低群

に群わけを行った。Table3に、各群の見捨てられ不安変化量と親密性の回避変化量の平均と標準偏差を示した。

ハーディネスの高低群と体験数多少群、重要度高低群、解決度高低群、満足度高低群を独立変数とし、見捨てられ不安変化量と親密性の回避変化量を従属変数とした2要因分散分析(ANOVA)を行った。

Table3 ハーディネス(HD)・ライフイベント(LE)群別のアタッチメント変化量

	HD							HD	LE	HD×LE	多重比較			
	高群(H)			低群(L)			ANOVA							
	N	M	SD	N	M	SD								
<b>見捨てられ不安変化量</b>														
NLE体験数	高群(h)	49	-.06	14.47	42	-2.45	11.43	2.942 †			H>L			
	低群(l)	37	-.05	14.85	49	-4.18	9.03							
NLE重要度	高群(h)	43	1.00	16.69	50	-4.90	9.21		3.157 †	Hh>Hl, Lh<Ll				
	低群(l)	41	-2.22	10.76	39	-1.51	10.93							
NLE解決度	高群(h)	45	.24	12.99	41	-6.56	10.94		2.904 †	Hh>Hl, Lh<Ll				
	低群(l)	39	-.69	16.61	49	-1.04	8.70							
PLE体験数	高群(h)	49	.45	10.96	29	-5.48	11.83							
	低群(l)	37	-.73	18.41	62	-2.40	9.26							
PLE重要度	高群(h)	43	-1.58	14.83	44	-4.41	10.32							
	低群(l)	42	1.36	14.43	43	-2.30	9.83							
PLE満足度	高群(h)	45	-.71	14.76	43	-5.33	10.59							
	低群(l)	41	.66	14.46	46	-1.87	9.67							
<b>親密性の回避変化量</b>														
NLE体験数	高群(h)	49	1.12	9.04	42	-1.48	7.23							
	低群(l)	37	-.08	10.09	49	.59	7.28							
NLE重要度	高群(h)	43	2.72	11.08	50	-1.40	6.86		6.579 *	Hh>Hl, Lh<Ll				
	低群(l)	41	-1.29	6.77	39	1.08	7.76							
NLE解決度	高群(h)	45	.78	9.50	41	-.12	7.14							
	低群(l)	39	.62	9.32	49	-.61	7.55							
PLE体験数	高群(h)	49	1.14	7.84	29	-2.03	6.24							
	低群(l)	37	-.11	11.34	62	.42	7.66							
PLE重要度	高群(h)	43	.42	10.74	44	-1.27	7.56							
	低群(l)	42	.69	8.19	43	.95	7.07							
PLE満足度	高群(h)	45	1.58	11.02	43	-2.44	6.69		6.121 *	Lh<Ll				
	低群(l)	41	-.46	7.39	46	1.76	7.41							

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

見捨てられ不安変化量において、ハーディネス×NLE 体験数の ANOVA では、ハーディネス高低群で主効果が有意傾向であった( $F(1,180) = 2.942, p < .10$ )。ハーディネスが低い人は、見捨てられ不安が低下する傾向がみられた。

次に、ハーディネス×NLE 重要度の ANOVA において交互作用が有意傾向であり( $F(1,169) = 3.157, p < .10$ )、単純主効果検定を行った結果、ハーディネス高群では、NLE 重要度低群に見捨てられ不安の低下、ハーディネス低群では NLE 重要度高群に見捨てられ不安の低下がみられた。

ハーディネス×NLE 解決度の ANOVA では交互作用が有意傾向であった( $F(1,170) = 2.904, p < .10$ )。ハーディネス高群において、NLE 解決度低群の見捨てられ不安が低下した。逆に、ハーディネス低群では、NLE 解決度高群において見捨てられ不安が低下した。従って、ハーディネスが低く、NLE 解決度が高い場合に見捨てられ不安が大きく低下することがわかった。

ハーディネス×PLE 体験数、ハーディネス×PLE 重要度の ANOVA では、主効果、交互作用共に有意ではなかった。

さらに、親密性の回避変化量について、ハーディネス×NLE 重要度の ANOVA において交互作用が有意であった( $F(1,169) = 6.579, p < .05$ )。単純主効果の検定によると、ハーディネス高群において、NLE 重要度高群の方が低群よりも親密性の回避の上昇がみられた。ハーディ

ネス低群では逆に、NLE 重要度低群に親密性の回避の低下がみられた( $F(1,174) = 5.117, p < .05$ )。

また、ハーディネス×PLE 満足度の ANOVA で交互作用が有意であった( $F(1,171) = 6.121, p < .05$ )。単純主効果検定を行った結果、ハーディネス低群において PLE 満足度高群の親密性の回避が低下した。従って、ハーディネスが低く、PLE 満足度が高いと親密性の回避が低下することがわかった。

### アタッチメント変化群別のハーディネスとライフイベントの比較

見捨てられ不安変化量、親密性の回避変化量の標準得点を用い、それぞれ平均値から+0.75以上を上昇群、±0.75を変化なし群、-0.75以下を低下群に分類した。見捨てられ不安群を独立変数、調査1のチャレンジ、コントロール、コミットメント、ハーディネス合計、調査2のNLE 体験数、NLE 重要度、NLE 解決度、PLE 体験数、PLE 重要度、PLE 満足度を従属変数にした1要因分散分析をおこなった。その結果をTable4に示した。

コミットメントとハーディネス合計において有意な群間差がみられた( $F(2,180) = 5.998, p < .01, F(2,178) = 2.943, p < .10$ )。多重比較を行ったところ、コミットメントでは、上昇群が他の2群に比べて有意に高い得点を示した。次にハーディネス合計では、上昇群が低下群に比べ有意に高い得点を示した。また、親密性の回避変化群間に有意差はみとめられなかった。

Table4 見捨てられ不安変化量3群のハーディネス、LEの比較

	a. 上昇群			b. 無変化群			c. 下降群			F	多重比較
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD		
チャレンジ	31	15.74	3.66	115	14.54	3.48	35	14.54	4.03	1.395	
コントロール	33	13.24	4.45	115	12.76	3.09	35	12.00	3.91	1.097	
コミットメント	33	15.30	3.19	115	13.55	3.03	35	12.65	3.84	5.997 **	b,c<a
ハーディネス合計	31	43.74	8.13	115	40.86	7.05	35	39.20	9.22	2.934 †	c<a
NLE体験数	33	6.69	3.82	115	6.44	3.52	35	5.74	3.76	.679	
NLE重要度	31	3.08	.55	114	2.88	.61	34	2.82	.67	1.715	
NLE解決度	32	2.59	.79	113	2.51	.60	35	2.73	.78	1.370	
PLE体験数	33	6.57	3.07	115	6.37	2.93	35	6.42	2.66	.061	
PLE重要度	32	3.51	.44	112	3.42	.46	34	3.56	.39	1.381	
PLE満足度	32	3.28	.58	114	3.26	.54	35	3.19	.75	.239	

†  $p < 0.10, ** p < .01$

### アタッチメントスタイルタイプ別のハーディネスとライフイベントの比較

岡島(2010)と同様に、調査1、調査2の見捨てられ不安と親密性の回避の得点を用いて、それぞれ Ward 法によるクラスター分析を行い、4つのアタッチメントスタイルのタイプ(安定型、恐れ型、とらわれ型、拒絶型)に分類した。調査1と調査2におけるアタッチメントスタイ

考 察

ルにおける人数を Table5 に示した。調査 1 で安定型と判断されたのは 56 名、とらわれ型は 62 名、拒絶型は 13 名、恐れ型は 48 名であった。また、調査 2 で安定型と判断されたのは 70 名、とらわれ型は 45 名、拒絶型は 26 名、恐れ型は 38 名であった。このうち、調査 1 から調査 2 の間に、安定型が継続した人(NCS, Non Change Secure)は 46 名 (82.1%)、不安定型でそのまま同じ型で継続した人(NCI, Non Change Insecure)は 65 名 (52.8%)、安定型から不安定型に変化した人(CI, Change Insecure)は 10 名 (17.9%)、不安定型から安定型に変化した人(CS, Change Secure)は、24 名 (34.3%)、不安定型から別の不安定型に変化した人(CAI, Change Another Insecure)は 34 名 (27.6%) であった。4 分類のアタッチメントスタイルでは、62%の人が同じアタッチメントスタイルに分類されたことが示された( $k = .47, p < .001$ )。また、人数比の偏りを検討するために  $\chi^2$  検定を行ったところ、共に有意な人数比率の偏りがみられた ( $\chi^2 = 49.29, p < .001$ )。

Table5 調査 1 と調査 2 におけるアタッチメントスタイルタイプの人数

		調査2				合計
		安定	とらわれ	拒絶	恐れ	
調査1	安定	46	4	2	4	56
	とらわれ	15	33	2	12	62
	拒絶	1	0	11	1	13
	恐れ	8	8	11	21	48
合計		70	45	26	38	179

アタッチメントスタイルタイプ別のハーディネスの比較

次に、クラスター分析で分類した各 4 群の調査 1 から調査 2 への変化状況により、NCS, NCI, CI, CS, CAI の 5 群に分類し、各群のハーディネス得点の平均と標準偏差を Table6 に示した。一要因分散分析の結果、5 群間のハーディネスを比較した結果、NCS が NCI と CAI に比べて高い得点を示した( $F(3,176) = 6.979, p < .001$ )。

Table6 アタッチメントスタイル変化群別のハーディネス

	N	M	SD	F	多重比較
NCS	45	45.13	7.13	6.979 ***	NCI,CAI < NCS
CI	9	43.00	7.54		
CS	24	41.91	7.91		
NCI	65	37.78	7.56		
CAI	34	40.67	6.62		

\*\*\*  $p < .001$

本研究では、アタッチメントスタイルの変容とハーディネス及びライフイベントの関連を明らかにすることを目的とし、大学生を対象とした質問紙調査を行った。その結果、調査 1 と調査 2 の見捨てられ不安得点と親密性の回避得点に大きな差はみられず、また、両尺度とも調査 1 と調査 2 には比較的高い正の相関が認められ、アタッチメントスタイルの安定性は高いことが示唆された。

調査 1 のハーディネス(コントロールとコミットメント)が調査 2 の見捨てられ不安及び親密性の回避に負の有意な相関がみられ、種々の出来事が統制可能であるとする傾向や周囲の状況に関与する傾向は、アタッチメントスタイルの安定型に関連するという仮説 1 を支持するものであった。

さらに、調査 1 から調査 2 へ見捨てられ不安及び親密性の回避の変化量に及ぼすハーディネスとライフイベントの影響を検討した。ハーディネス高低群、各ライフイベント指標の高低群に分け、分散分析を行ったところ、ハーディネス低群において見捨てられ不安の低下傾向が認められた。ネガティブライフイベントの重要度、体験数、解決度の主効果はいずれも有意ではなく、仮説 2 は支持されなかった。また、ハーディネスとネガティブライフイベントの重要度、解決度との交互作用が有意であった。ネガティブライフイベントの重要度と解決度が高いと、ハーディネスが低いほど見捨てられ不安は低下することが認められ、仮説 3 とは逆の結果となった。

一方、親密性の回避については、ハーディネスの主効果は認められず、ライフイベントとの交互作用のみであった。ネガティブライフイベントの重要度について、ハーディネスが高いと、重要度が高いほど親密性の回避が上昇するという結果は、他者との距離をとることによって、自身が抱えている重要なネガティブライフイベントへの対応に専念しようとしているとも考えられる。また、ハーディネスが低い人は、ポジティブライフイベントの満足度が高いと親密性の回避が低下し、周囲の人との親密さが高まることが示唆された。

さらに、見捨てられ不安変化量に基づく上昇群、無変化群、下降群の比較から、見捨てられ不安上昇群のハーディネス(コミットメント)が高いことが認められた。すなわち、種々のライフイベントに自己関与が高い人ほど、見捨てられ不安が高まることが示唆された。

ハーディネスが高いと、見捨てられ不安と親密性の回避は低いことが示された。また、見捨てられ不安が上昇し

た人のハーディネスが高いという結果は、全体として両尺度とも低下傾向がみられることを反映していると考えられる。ハーディネスが低い人はライフイベントの認知によって影響を受けやすいとも考えられる。そのため、主観的な満足度や解決度の高さによって見捨てられ不安および親密性の回避が低下するという変動が生じたのではないだろうか。

アタッチメントスタイルのタイプ別分析の結果、変動が多かったのは、とらわれ型と恐れ型であり、見捨てられ不安次元の変動性を反映した結果であった。この結果は、日誌法より不安定アンビバレント型の日常的な社会的活動が大きな変動を示すとした Tidwell, Reis, & Shaver (1996), 関係性スキーマの活性化を指摘した (Baldwin & Fehr, 1995) の報告と一致していた。

また、アタッチメントスタイルのタイプ全体での変容率は 38%であった。岡島(2010)は、1ヶ月の間隔で調査を行い、アタッチメントスタイルが変容した者は 25%であると報告している。本研究では、より長期間にわたる縦断的な調査であるが、やや高い変化率となった。

本研究の結果から、見捨てられ不安と親密性の回避を低く保つことにハーディネスが作用していると考えられる。すなわち、ハーディネスは一時的な変化よりも長期的な安定型の維持を保つように影響すると推察される。また、ライフイベントはアタッチメントスタイルの変容を促す要因と考えることができる。

青年期後期は、大学生活や職業生活を開始し、新しい人間関係、勉強、アルバイトやサークル活動、あるいは仕事を通して種々のライフイベントを体験する時期である。今後、ライフイベントの内容まで取り上げることで、より詳細なアタッチメントスタイルの変容過程を検討することが必要と考えられる。

## 引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

安藤智子・遠藤利彦 (2005) 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント 生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房

Baldwin, M. W., & Fehr, B. (1995). On the instability of attachment style ratings. *Personal Relationships*, 2, 247-261.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.

Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. (ボウルビィ. J / 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子・黒田聖一(訳) (1991). 愛着行動 母子関係の理論 1 岩崎学術出版社)

Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol. 2. Separation*. New York: Basic Books. (ボウルビィ. J / 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1991) 分離不安 母子関係の理論 2 岩崎学術出版社)

Bowlby, J. (1979). *The Making and Breaking of Affective Bonds*. London, England: Tavistock.

Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss. Vol. 3. Loss*. New York: Basic Books. (ボウルビィ. J / 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子 (訳) (1991) 対象喪失 母子関係の理論 3 岩崎学術出版社)

細田幸子・三浦正江 (2011) 大学生版デリーアアップリフツ 尺度 (DUS) の構成 カウンセリング研究, 44, 235-243.

城佳子(2010a). 大学生のハーディネスとコーピング, ライフイベントの関連の検討 生活科学研究, 32, 37-47.

城佳子(2010b). ハーディネスとパーソナリティ特性, ストレッサー体験, ストレス反応および生活習慣との関連 人間科学研究, 32, 9-19.

Kobasa, S. C. (1979). Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1-11.

Main, M., & Goldwyn, R. (1984). *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript.

中尾達馬(2010). 面識があまりなくとも、他者の愛着スタイルを認識することは可能なのか?—愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の一致度の検討— パーソナリティ研究, 19, 146-156.

中尾達馬・加藤和生(2004a). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.

中尾達馬・加藤和生(2004b). 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.

中尾達馬・加藤和生(2006). 外的脅威と成人愛着の関連—福岡西方沖地震における不安, コーピング, 愛着スタイルの時間的安定性— 日本心理学会第 70 回大会発表論文

- 集, 264.
- 岡島泰三(2010). 青年期におけるアタッチメントスタイルの変化と恋人の応答性 青年心理学研究, 22, 33-44.
- Pearson,D.R., Cohn,D.A., Cowan,P.A., & Cowan,C.P. (1994) Earned- and continuous-security in adult attachment: Relation to depressive symptomatology and parenting style. *Development and Psychopathology*, 6, 925-933.
- 多田志麻子・濱野恵一 (2008). ハーディネス尺度の信頼性と妥当性の検討 ノートルダム清心女子大学紀要生活経営学・児童学・食品・栄養学編 27(1), 56-62.
- Tidwell, M.O., Reis, H.T., & Shaver, P.R. (1996). Attachment, attractiveness, and social interaction: A diary study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 729-745.
- 鈴木綾子・大塚泰正・小杉正太郎 2001 大学生を対象としたライフイベント尺度作成の試み(1) 日本心理学会第65回大会発表論文集, 1061.
- Waters,E., Merrick,S.K., Treboux,D., Crowell,J.A., & Albersheim,L. (2000) Attachment security in infancy and adult-hood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, 71,684-689.
- Weisfield,N., Sroufe,L.A.,& Egeland,N. (2000). Attachment from infancy to early adulthood in a high risk sample: Continuity, discontinuity, and their correlates. *Child Development*, 71, 684-689.

The Influences of Hardiness and Life  
Events on Modification of Attachment  
Styles

KAWAMOTO Kaworu and  
MIYAMOTO Kunio